

画像診断装置の共同利用による地域連携の推進

◆Summary

Promotion of regional cooperation by using modalities
It is very important for us to realize medical care, completed in the region that many kinds of regional medical institutions provide the patient-centered medical care in unified fashion. We are practicing smooth and efficient regional cooperation, and contributing community medicine by making good use of modalities.

荒木脳神経外科病院 理事長

荒木 攻



要旨…地域完結型医療を実現するには、地域のさまざまな医療機関が一体となつて患者中心の医療を行うことが重要です。当院ではモダリティの共同利用を活用して、円滑で効率的な地域連携を実践し、地域医療に貢献しています。

画像診断予約センター設立の経緯

当院は、1986年7月に広島市西部エリアにおける唯一の脳神経外科専門病院として開院しました。脳神経外科領域の医療の質の向上とともに、開院当初から「質の高い安全で安心な医療の提供を行い地域医療に貢献する」ことを理念に掲げ、今日でもその方針に従い、迷うことなく全人的な医療の提供に力を注いでいます。

また、時期を同じくして医療用画像診断機器の進歩は目覚ましいものがあり、MRIやCTなどに代表される画像診断装置（以下「モダリティ」という）は、今や病変の早期診断・治療の現場においては、不可欠な診断機器となっています。

私たちが目指す医療サービスは常に地域に根差していることが重要で、このモダリティを自院で独占するのではなく、地域の医療機関の皆様方と共同利用を行い、地域医療を担う中核病院として活動することが重要であると考えました。地域完結型医療を実現するためにも、2002年3月に画像診断予約センターを立ち上げ、モダリティ共同利用を開きました。

モダリティ共同利用への理解を求めて

モダリティ共同利用とは、単に利用医療機関を増やすのが目的ではなく、本来は地域医療の輪を作り出すのが目的です。それゆえ、地域連携の担い手として手を挙げた責任を全うすべく、地域連携を創造するという強い意志と当院スタッフの努力により、現在の共同利用の姿まで確立できました。十年一昔と言いますが、いろいろな苦労を振り返ることができます。

当時は、モダリティ共同利用を積極的に利用する医療機関は少なかつたのではないでしようか。また、当院が位置する広島市西区には共同利用ができる医療機関も存在していませんでした。

そのような状況下で、当院では地域連携を「顔の見える地域連携」と定義し、診療放射線技師長自ら広報活動を行い、モダリティの共同利用を提案してきました。撮影技術や医療知識を持ち合わせた技師が直接訪問し説明するという広報スタイルは、過去にもあまり例がなく相当インパクトがあつたようです。

近隣の医療機関を1件ずつ何度も訪問し、啓蒙して歩き続けたことで、我々が目指した共同利用に理解が少しずつ生まれてきました。そして今もなお、広報活動は継続しています。満足度の高い評価をいたぐためには、電話ではなく直接足を運ぶことは必須で、開設してからその考え方はずっと変わりません。地域から、より信頼される医療を目指すべく、現在も活動中です。まさに「顔の見える地域

連携」そのものです。

現在では、3・0テスラ及び1・5テスラ、2台のMRIと16列マルチスライスCTのモダリティ検査を柱として、地域からの撮影依頼を日々受ける体制で運用を行っています。即日の検査依頼などにも柔軟に対応できることによって、画像診断依頼も年々増加傾向にあり、地域の皆様のニーズを高めながら、安全・安心な医療提供を実践できていると実感しています。

モダリティ共同利用に求められる機能

当院では、モダリティの共同利用に必要な機能は次の3つと考え、独自性を持った画像診断予約センターの整備に注力しました。

1. 検査報告の質の担保と撮影技術の向上。
(依頼医師の要望に100%応需)
2. 依頼から検査日までの短縮化と結果報告書の翌日発行の徹底。(診療スピードの向上)

3. かかりつけ医の変更は行わず、来院時

の患者待ちは時間ゼロ。(患者満足度の向上)

共同利用の現場においてはさまざまな検査依頼があり、高度医療機器だからこそ分かる質の高い検査結果が求められます。当院は脳神経外科の専門病院ですが、地域に密着しフルボディの領域を対象とした信頼性の高い検査結果をお返しできる体制を整えるために、放射線科専門医からの検査報告書を、検査翌日には依頼元医療機関に提出できるようなシステムを整えました。

具体的には、遠隔画像診断サービス会社で

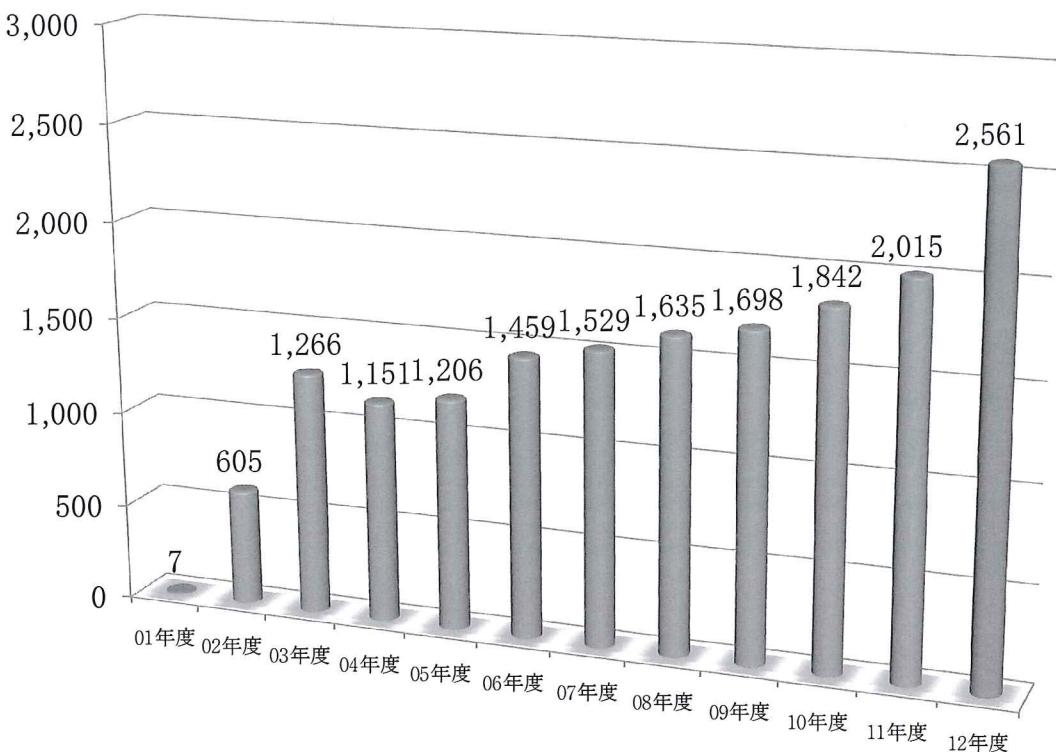


図1 画像診断予約センター利用実績 MRI/CT 共同利用

ある株式会社ドクターネットの読影システムを活用し、各専門領域や撮影される部位などを医療の専門性と質の確保することを可能としています。

このように共同利用には、依頼元医療機関、患者さん、そして当院全ての利用満足が継続する体制が求められ、このシステムを維持し継続するためのP D C Aサイクルを開設することも重要であり、開設より継続して取り組んできました。

モダリティ共同利用の利用実績

02年から始まった共同利用は、今年(13年)で12年目を迎えました。近年では共同利用実績が年間2500件を超え、12年度の共同利用実績は2561件となり、数値が示す通り(図1)、右肩上がりに着実に実績を伸ばしています。

一方、医療法で制度化された医療機関の機能別区分のうちの1つである地域医療支援病院には、モダリティ等の共同利用が、必要な病院機能として求められています。広島県には18の地域医療支援病院が存在し、広島県健康福祉局に提出した12年度の地域医療支援病院業務報告書からMRI及びCTのモダリティの共同利用件数を抜粋してみますと(図2)、上位5病院は、県立広島病院4817件、JA広島総合病院2180件、広島市立安佐市民病院1506件、広島赤十字原爆病院1477件、中国労災病院1135件となっています。当院は地域医療支援病院の指定を受けていませんが、これらの病院と比較



図2 広島県地域医療支援病院の共同利用実績 2012年度 MRI/CT 共同利用 (地域医療支援病院業務報告書より抜粋)

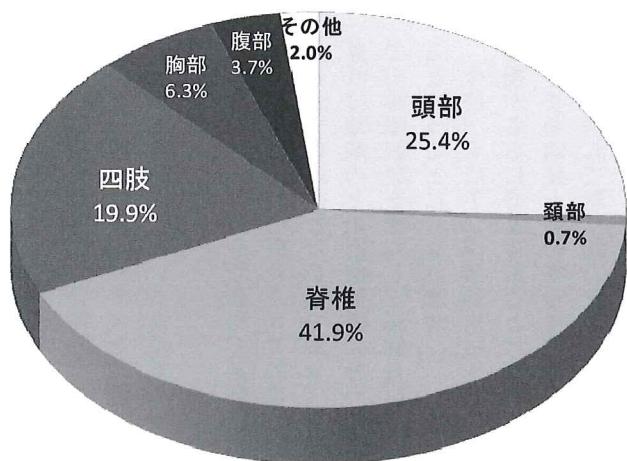


図4 検査部位内訳集計
MRI/CT 共同利用
対象期間：02年3月～13年3月

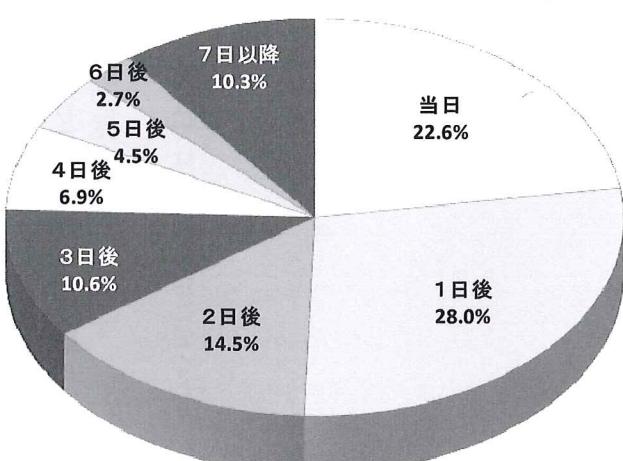


図3 検査依頼から検査実地日までの日数
MRI/CT 共同利用
対象期間：02年3月～13年3月

しても引きを取らず、むしろ高い水準の実績を残しています。

共同利用実績の増加の要因には、当院は10床と中規模病院の機能を最大限に生かし、小回りを利かせた対応ができることが挙げられます。具体的には、画像診断予約センターに直通電話を設置し現場の技師が直接対応することで、依頼元の医療機関からの具体的な指示や要望に直ちに対応できる体制を整えています。大病院に負けないきめ細かい対応で依頼元との距離を縮め、ここでもまさに「顔の見える医療」を実践しています。

また、実際に検査依頼の半数以上が検査依頼日の当日か翌日に検査を実施しており(図3)、検査実施日の翌日には画像診断の専門医による検査結果報告書の送付を全て行うなど、スピードイーな対応を実現しています。検査部位においても脳神経領域だけに留まらず、整形領域、内科領域、婦人科領域(図4)など多岐にわたる検査を実施しています。さらに、撮影する技師の教育にも力を入れています。現在8名の技師が日々の業務に当たっていますが、これらのモダリティを十分に使いこなし、診断価値の高い画像を提供するために、毎月の定期的な勉強会や各種学会、研修会への積極参加、新人研修プログラムの策定や教育ラダーによる取り組みなど、どの技師が撮影しても同じ結果が得られるよう、業務の標準化に取り組んでいます。

結果として、延べ170以上の医療機関から年間2500件を超えるモダリティの共同利用実績を残し地域医療の輪を作ると同時に、地域医療に貢献をしています。

ネットワークと安全性

12年6月からはモダリティへの検査依頼及び結果照会において、直通電話に加えてインターネットからのアクセスを可能としました。同時にモダリティを設置されている医療機関に対しては、脳卒中連携強化を主体に脳神経領域に特化した遠隔読影診断サービスもインターネットでの利用を可能とし、更なる効率的な医療連携が取れる体制を整えました。

しかしながら、地域連携の輪を作り出す上で当院が最も重視してきている点は、ネットワーク構築に関わる安全性です。医療情報を当院のみならず、依頼元に配慮し取り扱うことは、共同利用を推奨する立場においては当然の義務であってかかるべきです。その安全性を担保できなければ、依頼元の医療機関からのお依頼は望めません。

地域医療連携ネットワークは、当院や地域医療機関が高いセキュリティを担保するVPNによってつながっています。外部からの侵

入を防ぎ、そのVPN内にある我々だけが診療情報を共有できる仕組みです。ネットワークの連携医療機関に公開したいという場合には、SSLセキュリティと閲覧するための証明書を利用するといった多重の安全策が施されています。

こうした安全策を背景に、医療機関が患者さんに向けての医療サービスの質を向上させることができることは必然であり、患者側から見れば地域のどの医療機関に行つても、今までの診療履歴を承知した医師らに診てもらえるということになります。

今後、ICT（情報通信技術）による地域連携がさらに普及することは間違いないく、さまざまな角度からの安全性確保と柔軟な改善に、継続して取り組んでいかなければならぬと考えています。

地域医療は人と人との密接な関わり合つて成り立つており、共同利用や地域連携を進めこられた傍らには、多くのその関わりがあつたからにほかりません。当院の医師及び診療放射線技師をはじめとするコメディカルスタッフ、地域医療の輪にご賛同いただいている皆さまに心より感謝を申し上げ、稿を終えたいと存じます。

※

※

モダリティ共同利用を進めながら行う 「顔の見える地域連携」

当院では地域の皆様に安心していただけ

荒木 攻（あらき・おさむ） ● 広島県出身。
広島大医学卒。同大脳神経外科教室を経て、岡山県（財）倉敷中央病院脳神経外科勤務の後、86年荒木脳神経外科病院を開設、現在に至る。

